

如何にして宗教へ導いたら

よいであらうか(二)

—— シュライエルマッヘル、フレーベルの教を想ひだしながら ——

京都平安女學院專政部 齋藤善太郎

II

シュライエルマッヘルが、何事にしても宗教からはするな、宗教といふものは凡て伴つてあるべきものであつて、其れから出て事をなすべきものではない、といふ意味の戒めをしてゐる所があります。傾聽すべき言葉であると思ひます。

前に申しましたやうに——尤も其れは偶然の事情からまことに粗末な、不束な、言ひ足りないものとなりまして、まことに心苦しく存じてをりますが——シュライエルマッヘルによりますと、宗教は哲學でもなく道徳でもなく、有りごあらゆるものゝ凡てを、彼の言葉によりますと「宇宙」を、心すなほに感じ享けそして其れを靜かに味はひつゝあることでありますから、その意味で、宇宙を如何に考へたらいゝだらうとか、宇宙に對して如何に爲たらいゝであらうか、といふやうにして、いはゞ出しやばつて行くことではありませんから、それで、前に云ふやうに、宗教から出て事を爲すべきではない、といふ主張が出て來るのであります。

其の主張にしましても、また其れを生む源となつてゐる宗教本質論にしても、たゞそれだけを切り放して見るこすればするぶん誤解を伴ひ易いものであります。したがつて其れらを正しく解釋するためには、然ういふ説や主張が如何にして現はるゝに至つたかの背景や、また、さういふ時代的衣の下に併し如何に古典的眞理が宿つてゐるか、なきを知る必要が出て來ますが、それは今は擇いて、たゞ、それらは、彼が其の周囲の、少くとも彼から見れば誤つてゐるこ思はれた考へ方に對し、述べたもので、したがつて強調せられたる一面がその一面性の故に誤解を呼び易いものではあるが併し正に味ある鹽の如き眞理性を持つてゐることをだけ、注意していたゞきたいのです。

そして此の點、宗教から出でては事をなすべきではないこいふ戒めからも、宗教一般に關して然うであるやうに、我等に行く手への正しき道を指示して貰ります。

五

彼が云ふ意味を、私達のそばにもつてくれれば、ちやうどフレーベルにおいては、一つの云ひ方にすれば、生きてゐること其のことがそのまゝ宗教であるやうに、そして教育するこ事が、そのまゝ宗教であるやうに、正にその如く、人の爲し、生くることをそのこ事が、宇宙の内に於ける、其れにかき抱かれたることとしてそのまゝ宗教であるのであるから、宗教とは、學問とか、道德とか、その他生活における諸多の事實と相並んで唯それらのうちの一づこしてあるこいふやうなものではない、生活があれこれにつゝましく口の如何なるものであるかを宇宙の内に於て識りながら、彼の言葉によれば「直觀こ感情」^ミにおいて識りながら、宇宙の内に於て生くることを其のことに他ならぬのであるから、したがつて、此の事は道徳から出でるが彼の事は宗教から出でる、こいふやうな關係の起るはずもなく、また然ういふやうな爲かたでは、一見生真面目に見えてるても併し正當ではない、こいふこになるのであります。簡単に云へば、宗教こいふのは、生活な

ら生活、教育なら教育そのことをそれの本質にかなつて爲すことに他ならないのであるから、今更宗教からながいふことは、もさく宗教若しくは宗教教育を至める源になるから、然うすべきではない、といふことになるのであります。

それにまた、宗教は本質に於ては神との、彼の場合宇宙との、生の關連そのものであるべきであるから、言ひ換へて、思想とか行爲とかになるまゝの、若しくは其れらよりもより深い、更に若しくは其れらよりもより高い、彼の言葉によれば心の最も奥深きところに於ける、最も素直なる、また最も鋭敏なる、「直觀感情」に於ける、「宇宙」の生の交渉そのものなのであるから、最も祕められたる、いはゞ聖なる愛の抱擁そのもの、何ものをも近寄らしめず、またいつこへもそこを放れては出でゆかうともせざる、たゞ對象との生の合一に浸りきらうとするこそそのものなのであるから、ものを考へやうとか、ここを爲さうとか、そんな他事を顧みてゐる暇のないものである、云ふのであります。さういふ意味で彼は——これも對立的に強調せられたるものであります——宗教の特異性、獨立性、いな崇高性を強く述べるところからも、宗教から出て事を爲すべきではない云々つてゐたのであります。それを私達のそばにもつてくれば、まことに宗教的な心持、まことに宗教的な態度からして生活なら生活、教育なら教育をなしてならないといふのは固より無い、否それどころか、正に其の如く宗教的でありえんがため、彼の言ひ方によれば其の如く宗教を伴つてありえんがために、宗教をば飽くまでも宗教として立てよ、何らかの道具、何らかの方便の如きものに墮せしむることを断然と避けよ、また眞に宗教的であり、宗教を生きんがために、他事への顧慮を捨てよ、かくして眞面目にたゞ宗教に專念せば、そこよりして、生活も教育もおのづから宗教に伴はるゝこととなり、したがつて其れらは眞に宗教的心持または態度をもつてなさるゝであらう。若し然うしないならば、所謂宗教より出でゝ事をなすと稱する場合の、實は宗教には非ざる、たゞ歪められたる知識とか習慣とか徳行とかにすぎぬものをもつて、生活を濁し教育を歪め、ゆきつくことは、生活を殺し教育を殺し、宗教への

正しき門さまへをも鎖すのみのことにして終るのであるから、宗教よりしては生活をも教育をも爲すな、といふやうなことになります。簡単に申しますと、宗教は方便にならざるべきものでもなく、また爲し得もしないものであり、若し、良き心根からにしても方便的に使つたら、せつかくの良き心根も自殺に終らざるを得なくなるし、それに宗教そのものまで、生活からも教育からも遠く閉め出されてしまふことになるから、宗教への關心を持てば持つほど、生活なり教育なりにおいて、注意反省しなければならん、といふことになるのであります。

六

いろいろ誤解を誘ひ易い言ひ方ではあります、まことに傾聽すべき戒めであると思はれます。

シュライエルマッヘルに聽きながら六月號で述べたことは、たいへん不束ではありましたが、宗教々育を眞に爲さうとするならば、しか念願する教育者その人が、生活の底の底、髓の髓よりして自ら宗教的生活をなすよりなく、また、たゞ其れをさへなしえてあれば事は足りる、其れ以外の、外的なる習慣の傳達とか、まして神學めいた物語の注入などでは、本質的立場よりしては宗教々育において何物をもなしえぬ、要是先づ教育者自ら宗教的に鳴れ、しかば被教育者等もおのづから其れへ、宗教的に鳴り出るであらう、といふ主旨のことでありましたが、こんどの所は、宗教そのものゝ特異性獨立性絶對性を眞面目に認めてなせ、しかなして宗教々育なら宗教々育をなすところに、眞の宗教々育がなされるであらう、然うするところにはじめて、宗教より出づるにも非ず、宗教へ行くにも非ず、しかも宗教と言はずして實は宗教の内に包まれ、眞に宗教より出でたる、また眞に宗教へ行く、生きたる教育、したがつて眞の宗教々育がなされるであらう、といふ意味の所を、シュライエルマッヘルから紹介したくなります。前にも云ひましたやうに共に對立的に強調せられてゐる言ひ方でありますから、十分注意して其の言はうとする真意を聽かなければならぬのであります、さす

がに、近代的な宗教理解への道を拓ける人の指示であるだけに、さもすれば踏み迷はうとする我々の宗教々育を、正道へへへへ導きかへさうとしてくれるものであります。

附記一、「こんど」の所の、シュライエルマッヘルの本文は、石原譯の本にすれば一三八頁、原本にすれば六九頁で、宗教の本質論をしてゐる第二講の所で、『…併し宗教的感情は神聖なる音樂の如くに人間のあらゆる行ひに伴はねばならぬ、人間は凡てのことを宗教を伴うて爲すべきであつて、宗教の動機から爲してはならない』であります。

附記二、「宗教は本質に於ては神との生の關連そのものであるべきである」このについては、進んで、キンデルバントの有名な宗教論『聖』を參照していただきたいと思います。それは今岩波文庫の中に篠田英雄氏譯ではいつてをります。

附記三、シュライエルマッヘルの宗教論については、玉川文庫中の福島政雄氏「シュ氏宗教教育論」も御参考にならうと思ひます。(この次からフレーベルのことに移りたいと思つてをります)。